地球のステージ

43号

In the sound and picture,
you can find the message of the earth with your heart.

地球のステージ通信　2017年7月25日発行

Frontline

心のケアワークショップ
(パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区)

パレスチナ支援事業

外務省の支援を受けて２０１７年３月８日より始まった
「ガザ地区・ヨルダン川西岸における
危険地帯居住児童に対する心理社会的ケア及び実践者育成事業」
まずは新規事業地であるヨルダン川西岸地区と
そこでの活動の様子をお伝えします

◆ヨルダン川西岸地区って どんなとこ？

イエス・キリストが洗礼を受けたと言われるヨルダン川。アンチレバノン山脈からガリラヤ湖を通って死海まで南北に流れるこの川の西にヨルダンとイスラエルに挟まれる形で位置しているのがヨルダン川西岸地区です。三重県とほぼ同じ規模の同地区には３００万人弱の人々が暮らしており、その中に80万人を超えるパレスチナ登録難民が含まれています。１９４８年のイスラエル建国宣言とそれに伴って始まった第一次中東戦争によって生じたパレスチナ難民。故郷を追われ、ヨルダン川西岸地区やガザ地区、周辺諸国のヨルダン、シリア、レバノンに逃れた彼らを受け入れるため各地に設置された難民キャンプは現在61を数えますが、その内19キャンプがヨルダン川西岸地区にあります。これらのキャンプには同地区80万強の登録難民の20～30％が暮らしており、本新規事業は同19キャンプの中の2つ、カランディアキャンプとジャラゾンキャンプにて国連パレスチナ難民救済事業機関（ＵＮＲＷＡ）が運営する男子小中学校と女子小中学校の５～６年生、計１０５名を対象に心理社会的ケアを実施しています。

（上）ヨルダン川西岸地区の周辺地図
（下）活動を支える団体のロゴ

◆パレスチナの難民キャンプ

さて、みなさんは「難民キャンプ」と聞いてどのような様子を想像されますか?テントやプレハブが密集して立ち並ぶ一時避難所のようなイメージが最も一般的でしょうか。

最初はこのようなイメージ通りにテントが立ち並んでいたパレスチナ難民キャンプですが、皮肉なことに、約70年に及ぶその歴史の長さ故、現在はその多くが一見すると普通の街とあまり変わらない様相を呈しています。

しかし、一見普通の街のように見えたとしても、そこはやはり難民キャンプ。あくまでも仮設住居としてひしめき合うように建てられた家々や劣化するインフラ、高い失業率に貧困、ドラッグなど実に様々な問題を抱えています。加えて、主要な検問所を抱えるカランディアとイスラエルの入植地に隣接するジャラゾンはその立地故にイスラエル軍や入植者との衝突が頻繁に起きており死傷者が後を絶ちません。これら多くの問題が難民キャンプに暮らす人々の心に与え続けている影響は計り知れないものがあります。

(上) ジャラゾンキャンプ
(下) カランディアキャンプ

◆心のケアがめざすもの

このような中にあって、現地のニーズに的確に対応したプログラムとして高い関心を集めているフロントラインの心のケア(心理社会的ケア)。このプログラムは子どもたちが自身のトラウマと向き合い、分かち合い、共に乗り越えていくことをサポートするため、二次元から三次元、四次元へと段階を踏んで構成されたワークショップ(WS)スタイルの表現の場を提供するものです。

◆活動を通して語られる子どもたちの世界

絵の中に体験や思いが投影されていく

事業開始からこれまでに二次元表現である写真言語と描画のWSを実施してきました。

カランディアとジャラゾンの子どもたちがどのようなことを表現してくれるのか楽しみにしながら始まったプログラムでしたが、のっけから彼らが直面している現実に圧倒されてしまいました。

様々ある写真の中から真っ先にイスラエルやユダヤ教に関する写真を選び出し、怒りや憎しみを口にしたり石を投げに行くぞと興奮して叫び出したりする男の子たち。自らの被弾体験や目の前で家族がイスラエル兵に連行された体験、投獄され続けている身内について語る子もいれば、殉教者について誇らしげに語る子や自分も殉教するのが夢だと語る子もいます。自然風景の一つとして用意した海の写真も、彼らにとっては移動の自由を奪われた占領生活の象徴です。

また、描画では用意されたテーマに対して多くの子ども達が特定のものを条件反射的に描く様子が見られました。もちろん全員が同じものを描いたわけではないのですが、テーマごとに多かった絵をまとめてみました。

好きなもの・こと:パレスチナ国旗・エルサレム・家(実際の家ではなくアイコンとして)
嫌いなもの・こと:イスラエル国旗・イスラエル兵・分離壁・検問所
大切なもの・こと:好きなもの・ことほぼ同じ
無くしたもの・こと:殉教者・亡くなった身内・エルサレム・1948年に奪われた故郷
忘れられないショッキングな体験:無くしたもの・こととほぼ同じ。

写真言語法
写真から連想するエピソードを言葉にしていく

グループでの取り組みを大切に

占領という問題がいかに子どもたちの日常生活や思考を文字通り「占領」しているのかということに衝撃を受けるばかりですが、友達とサッカーをするのが好き、いつもからかってくる友達が嫌い、飼っている大切な亀が赤ちゃんを産んだ、お気に入りの自転車を盗まれた、いとこの前で友達に悪口を言われてショックだった等、ポジティブであれネガティブであれ、占領生活の中にもある生き生きとした体験を切り取って描いた子どもたちもいたことには少しほっとしました。

WSを通して接する子どもたちの様子やそこから見えてくる難民キャンプの現状を考えていると、「お国のために」と個人の人生が国家に絡めとられ、敵と戦い命を落とすことが英雄視されていた戦時中の日本もこんな感じだったのだろうかと思うことがよくあります。殉教者に憧れ石を投げに行くぞと叫ぶ男の子たちに「暴力はだめ」だとか「平和が大事」と言って聞かせることは簡単ですが、そうした言葉はただただ空虚に響くばかりです。それはきっと、子どもたちにとって、「お国のために」の代わりになるスローガンが必要なのではなく、一人一人が考えて自らの生き方考え方を選択していくことこそが大切だからなのだと思います。

友達の語りをわかちあっていく

心理社会的ケアはトラウマの原因となった恐怖体験と向き合うことで、その体験が脅威として自分を圧倒し続けることを止め、過去の一体験として自分の中に組み込むというプロセスを辿ります。つまり、トラウマによってもたらされた無力感から抜け出し自分の力を取り戻すことで、本来持っているポテンシャルを十二分に生かせるようにしていくのです。

このため、WSでは子どもたちに作品を発表してもらった後のグループディスカッションを大切にしています。パレスチナの国旗が好き・大切なのはなぜだろう?パレスチナの国旗が意味しているものは具体的に何だろう?1948年に奪われた故郷に今戻れるとして、そこにいるイスラエル人達はどうするの?本当に殺すしかないのかな?イスラエル兵がパレスチナ人に暴力をふるうことは許せないけど、その暴力はみんなが石を投げたり友達同士で殴り合ったりしていることとどう違うのかな?殉教者には憧れるけどそれだけかな?大好きだった人が殺されて悲しい気持ちはないかな?

どの質問にも正しい答えはなく、また、特定の答えを求めているわけでもありません。ただこうしてみんなで考え話し合っていくことこそが、子どもたちが自分の人生を取り戻し、自分の人生を自分の足で歩いていくことにつながると信じてこのプログラムを続けていきたいと思います。

(田川 奈美)

パレスチナでの活動

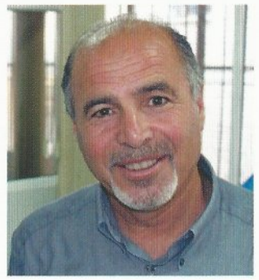
地球のステージでは 2003 年よりパレスチナ自治区南部のラファ市を拠点に、心のケア(心理社会的ケア)の活動を行っています。エジプトとの国境が近く、常に紛争のストレスや不安にさらされている子どもたち。心にたまったものを表現し、みんなで共有することで、心を平穏に保ち前向きに生きることをめざしています。2014 年より外務省の日本 NGO 連携無償資金協力のスキームを活用し、国境近くに住む子どもたちと聴力障がいの子どもたちを対象に心のケアの活動を展開。2017 年 3 月からはこれまでの事業に加え、ハイン・ユニス市の地元団体に心のケアの手法を伝えていく他、ヨルダン川西岸地区でも心のケアの取り組みを開始。現地では「フロントライン(Frontline)」という活動名称を使用しています。

こんな人たちと一緒に事業を実施しています！

ヨルダン川西岸地区での活動は地元 NGO “Nafs for Empowerment”（以後 ナフス）とパートナー契約を結んで行なっています。パレスチナ人の心の健康をめざすナフスは臨床心理士であるナーセルさんによって 2010 年に設立されました。ナフスにとって本格的な事業実施は今回が初めてになるため、みんなとても張り切ってくれています。

① 名前　② 趣味　③ 好きな言葉　④ 事業について　⑤ 日本のみなさんに一言

① エリーニ・ムスタクレム（コーディネーター）
② 読書・楽器演奏
③ 燃え残ったタバコが火事を起こすこともある、そして、私たちを導く光となることも（詩人ラシード・フセインの詩の一節）
④ とてもフレンドリーな職場環境の中で、スタッフ同士助け合いながら事業目標を達成するためにがんばっています。他の多くの事業とは異なり、本当にパレスチナの人々のためになる仕事ができていることがうれしいです。
⑤ 私たちはみなさんに助けてもらいたいわけではなく、理解し支持してもらいたいのです。パレスチナの現状は遠く離れた日本から見える様子とは必ずしも一致しません。いつの日か、もっと近くで、私たちが何を感じているのか、そして、なぜそのように感じているのかを知ってほしいです。ちなみに、パレスチナにはおいしくて安いマンゴーがありますよ！（駐在田川が話した宮崎マンゴーの値段に大衝撃を受けての発言です。）



① ナーセル・マタル（マネージャー）
② サッカー
③ 努力した分だけ報われる
④ この事業は当地ではまだ理論的なものでしかなかった心理社会的ケアを実践可能なものにしてくれました。今後もケアを必要としている子どもたちのために活動を継続していきたいです。
⑤ 私たちパレスチナ人は自由、社会正義、そして寛容を信じています。この事業を通して、パレスチナと日本の間で愛が育まれ、よりよい未来への希望を分かち合えることを願っています。

① ハッサン・ダワーブシェ（ファシリテーター）
② 料理
③ 新しいチャンスを恐れることは挫折への一歩だ
④ パレスチナの子どもたちが世界中の子どもたちと同じように普通の生活を送る権利を享受できるよう願ってきたので、この事業を通して彼らの心のケアに携わることができ本当に満足しています。僕自身、この仕事を通してパワーと希望をもらい、より人間らしく生きがいを持って働けるようになりました。
⑤ パレスチナの美しい歴史と自然、そして、様々な文化や宗教が混在している様を知ってもらいたいです。私たちは死ではなく生を愛し、平和を愛し、そして、近い将来自由を手に入れることを願っています。

① マイ・マンスール（ファシリテーター）
② 刺繍
③ この土地にこそ生きがいがある（詩人マハムード・ダルウィーシュの詩の一節）
④ 占領によって様々な困難に直面している難民キャンプの子どもたちに心理社会的ケアを提供することは私にとって大きな意味のあることです。
⑤ どんなに大変な状況でも、私たちパレスチナ人は人生の中に希望と幸せを見出したり創り出したりしようと生きています。私たちは文化や宗教の違いを超えて他者を理解し受け止めることができると信じています。

アラビア語で一言！

詩的、かつ、音楽的で美しい
アラビア語の簡単なあいさつを
ご紹介するこのコーナー。
初回はこの時期に合わせて、

「رمضان كريم」
（ラマダーン カリーム）
です。

ダマスカス門（エルサレム）
ラマダン仕様に飾られている

イスラーム暦で９番目の月ラマダーン。日本では断食が大変そうというイメージが強いかもしれませんが、現地ではワクワクするお祭りのような月として子どもも大人も大好きです。街中が電飾で彩られ、この月だけのお菓子が売られたり、イフタール（断食明けの食事）を食べるために夜な夜な親戚や友人みんなで集まったりと特別感いっぱいの１ヶ月。そんなラマダーン中はあいさつも特別。「ラマダーン カリーム／恵みの月ラマダーンおめでとう」と言いながら、神の恵みへの感謝の気持ちを表すのです。もしラマダーン中にイスラーム諸国へ旅することがあればぜひ使ってみてくださいね！

（上）
ラマダンのお菓子
アターイフ

（右）
街中に飾られる
ファーヌース

ここからはガザ地区での活動の様子です
第２フェーズに入り、
より地元への還元をめざし活動を展開しています

◆ガザ地区での取り組み

フロントラインは14年前から、ガザ地区最南端のラファ市にて、子どもたちへの心のケアを展開しています。閉鎖されたガザ地区は、空爆の危険と隣り合わせであることに加え、占領による不十分なインフラと高い失業率により、多くの人々が深刻なストレスを抱えています。そのため、心のケアに対する地域の人々の関心は強く、当初からフロントラインの活動への注目も高かったのですが、最近では、フロントラインの心のケアを卒業した子どもたちの確かな成長が見られるようになり、有効な心のケアであるとして多くの評価を得るまでになりました。

これもひとえに、日本からいつも心を寄せていただいているみなさまの力強いサポートのおかげであると思い、いつも感謝しながら精一杯活動させていただいています。

◆新たな試み

２０１７年３月８日に開始した新規事業のガザ地区での取り組みは、パートナー団体であるラファ市のエルアマル社会復帰協会との提携の元、隣りのハイン・ユニス市のワリード慈善団体、シャルキーヤ農業・開発協会と新たに

協力関係を結び、ガザ地区南部地域の子どもたちの心のケアと、実践者の育成を行っています。

当事業がこれまでと大きく違う点は次の2点です。

1. ラファ市にとどまらず、ガザ地区南部地域全域に確実な心のケアの地盤を築くことを目標に、新たに隣りのハイン・ユニス市に活動地を拡大した
2. 今後地元の人々の手でケアが継続されることをめざし、心のケア実践者育成に重点を置いた事業である

心のケアクラスにて、合計95名の子どもたちをケアしながら、心のケア実践者育成研修の対象者として、各提携団体の職員計18名を研修生として育成しています。研修生が、1年間を通して実際に子どもたちに心のケアを行うことで、確実な実践力を身につけてもらうことが大きな目標であり、フロントライン職員の指導とアドバイスの元、研修生3名で1クラスずつ、ケアクラスを担当しています。

描画ワークショップを学ぶ研修生

◆実践者を育てる

ケアクラスは各クラスとも週に1回開催され、段階を踏んだ表現活動のワークショップを通して、子どもたちの感情表現を引き出しながら進めていくため、これに合わせて、研修内容も1週間ごとにステップアップするようなサイクルで行われています。

1週間の実践者育成研修の流れとしては、まず、フロントライン職員間で勉強会とミーティングを行います。続いて、フロントライン職員から研修生への研修会を行った後、次回のケアクラスの実施計画を作成していきます。その後、研修生が実際に子どもたちへ心のケアワークショップを実施し、フロントライン職員と研修生で反省会を行います。指導に当たっているフロントライン職員は、心のケアの基本や子どもたちへの働きかけに関する指導に加え、互いに協力し合い、実践内容に関する評価と課題を共有しながら、日々内容を改善していくことの重要性も研修生に伝えています。

◆子どもたちの心の健康のために

事業開始前、初めてフロントラインの事業に関わる研修生たちが、このように系統立てて進む心のケアと研修の流れについていけるのか不安がありましたが、第1回目の研修会から、戸惑いながらも真剣に研修を受けている様子が見られ、ほっとしました。

研修生たちはもともと、子どもたちに関わる仕事をしている人たちなので、「子どもたちの心の健康のために」という思いが強く、回を重ねるごとに研修生同士チームワークを深め、真摯に子どもたちと向き合い、自分たちらしいケアクラスを進めようと懸命に学びを深めているようです。

このように、素晴らしい人材を研修生として受け入れることができたことにより、当事業が目標とする心のケアの普及と拡大をとても近くに感じることができています。

今後も、常に向上することを忘れずに、研修生と共に子どもたちを見守りながら、研修生始め多くの地元の人々にフロントラインのこれまでの経験を伝え、ガザ地区の人々と心のケアの実践と学びをより深めていきたいと思います。

（滝澤 那美子）

ワークショップの様子
研修生がファシリテートしていく

ザーキー！パレスチナ

パレスチナのザーキーな（おいしい）食べ物や飲み物を紹介するこのコーナー。
初回はこれを飲むとパレスチナに来たー！と感じるおもてなしのお茶、
シャーイ・マラメイヤ（セージティー）です。
スーッと身体中が浄化されていくような清涼感溢れるこのお茶。
セージは抗菌作用が強く、血液循環も促すので元気になれる一杯です！

1. ドライセージの葉を適量用意します。

2. お湯を沸かします。
*パレスチナではお茶やコーヒーを作る際、写真のようなイブリークという器具を使います。

3. お湯が沸騰したら紅茶とドライセージを加えひと煮立ち。

4. 茶葉とセージを漉したら、お好みでお砂糖を加えてできあがり！

本事業やパレスチナのことについてご質問やコメント等ございましたら
stageone@e-stageone.org までお寄せください。
子どもたちやフロントラインスタッフ、ナフスメンバー、研修生たちに
聞きたいことやアラビア語に関する質問も大歓迎です。